

体育大学における保育者養成の意義

Significance of Childhood Educator Training at Physical Education Universities

キーワード：卒業生、カリキュラム、保育、

体育

Keywords: Alumnus, Curriculum, Childcare and Education, Physisai Education

村石 理恵子
土井 晶子

武藤 伸司
平田 利矢子

阿江 美恵子
渡辺 博之

MURASHI Rieko
DOI Akiko

MUTO Shinji
HIRATA Riyako

AE Mieko
WATANABE Hiroyuki

I 研究の目的

1. 問題の背景

平成30(2018)年以降、18歳以下の人口が減り始め、所謂「2018問題」として大学入学者数の減少につながっていくことは明らかである。保育者養成においては、幼稚園教諭と保育士の資格免許を取得できる保育者養成課程^{*1}を開設している大学は乱立している。そのため、経営上の問題から大学の閉学を余儀なくされ、学生獲得競争が過熱してきている。待機児童の社会問題化や幼保一元化の流れの中で、幼稚園教諭の免許だけでは学生確保は難しく、本学でも平成30年度より児童教育学科に幼保コースを設置し、2年間で卒業と同時に幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格が取得できるようにした。

平成29年3月に新しい幼稚園教育要領及び保育所保育指針等が告示され、それに伴い、教育免許職員免許法及び教育職員免許法施行規則並びに指定保育士養成施設指定基準の改正がなされた。その新教育課程のなかに、「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」「ICTを用いた指導法」「発達障害を含む特別支援教育の充実」「学校と地域との連携、学校安全への対応」「子育て支援」など新

たにいくつかの内容が加わった。これらの内容はどこの保育者養成校でもカリキュラム上の対応が必要なものである。数多くある保育者養成課程のなかで、新教育課程に加わった内容にプラスして、特色のあるカリキュラムが必要である。そのような実情において、保育者養成課程の教育課程に特色のあるカリキュラムが求められており、本学の体育大学という特色と保育者養成の意義を改めて捉え直す必要が生じた。そこで本研究では体育大学における保育者養成の意義と今後の展望についてについて検討していく。

^{*1} 保育者養成課程とは、保育士資格及び幼稚園教諭免許状が取得できる学科または学部等を開設している教育課程のことである。

2. 児童教育学科の変遷

短大の発足は、1949(昭和24)年の短期大学設置基準の決定による。第二次世界大戦後の学制改革により、専門学校令に基づいた財団法人東京女子体育専門学校は、短期大学として発足しなければ学校教育を続けることができなくなったのである。1968年の幼児教育科の設置は、1963(昭和38)年の教育課程審議会で幼児教育の重要性が強調され、幼児教育の振興・普及という社会的気運が高まってい

たことによる。また、1962（昭和37）年に大学が開設されたが、女子の4年制大学への進学者よりも短大への進学者が急増しており、短大の定員を増やすことに財政的意味があった。1969年に保育資格も取得できるようにしたが、5年後、児童教育学科を開設した時に東京都知事あてに保育養成学校の指定施設取り消しを申請している。

幼稚園教諭と小学校教諭を輩出することは、就学人口の増加に伴い、優れた教員を求めている社会的要請にもこたえることになる、というのが児童教育学科設置の趣旨であったのではないかと、推測されている。当初の入学定員は50名としたが、志願者が多く、入学者は1973年218名、1974年318名、1975年400名であり、あまりの志願者の多さに定員増を申請して1975年には定員を150名とした。

このような入学志願状況は、大学への入学者がそれほど増えなかった時代に本学の財政の立て直しにつながった。今から見ると夢のような時代であったが、経済成長と高等教育への意識が高まっていった時代であった。また、女性は短大でよいという考え方の時代でもあったため、保健体育学科の志願者も大変多かったのである。

2008年にはユニット制を導入した。社会的背景として、少子化が進み4年制大学進学が当たり前にな

りつつあり、短期大学は志願者の減少が進んだため、スポーツを意識したユニットがつくられて、短大のテコ入れが図られた。手放した保育資格にも需要が見込まれたため、科目をそろえて資格の受験を可能にした。2012年にはさらに一歩進めて、大学3年次への編入で、2年間で中高の保健体育教員免許の取得を可能にした。しかし、短大への志願者の減少は歯止めがかからず、2018年に保育士資格取得の幼保コース、幼小コースが発足し、現在に至っている。

3. 研究の目的

本研究では、本学児童教育学科のカリキュラム変遷を踏まえ、体育大学（短期大学）における保育者養成の意義を再確認し、本学の児童教育学科がいかなるカリキュラムを目指すべきかの指針を示すことを目的とする。

II 研究の方法

児童教育学科の卒業生を対象としたアンケート調査及びインタビューを行う。それらに基づき、卒業生らが受講したカリキュラムに体育大学における特色や価値がいかなるものであったかを検討する。

表1 東京女子体育短期大学幼児教育科・児童教育学科の変遷

年	学 科・コース（取得資格）
1968年	幼児教育科 ↓ 幼稚園教諭、保育資格
1973年	廃止 児童教育学科 ↓ 幼稚園教諭二級 小学校教諭二級
1994年	幼稚園コース、小学校コース
2005年	幼稚園コース、幼稚園・幼小コース
2008年	幼ユニット制導入 幼・保ユニット（幼稚園教諭、保育士受験資格、児童スポーツユニット（小学校教諭、保体科目履修）、子どもユニット（幼・小教諭）
2012年	大学編入後2年で中高保健体育免許取得可能
2018年	↓ 保育士、幼稚園・小学校教諭 ↓ 幼保、幼小コース
2020年	↓ 現在に至る

本学のカリキュラム改訂毎にカテゴリ分けし、以下のように分類する。

表2 カテゴリ分類

カテゴリ	在学期間
第1カテゴリ	S44.4～S48.3
第2カテゴリ	S49.4～H 6.3
第3カテゴリ	H 6.4～H17.3
第4カテゴリ	H17.4～H30.3
第5カテゴリ	H30.4～R2.1

1. アンケート調査

アンケート調査では、「在学中の学び」と「卒業後にその学びがどのように活用されたか」、そして「カリキュラム改訂への意見」についての質問項目を設定する。回答は記述形式とした。

対象者については、カリキュラムの変遷に即して5つのカテゴリに分け、当該期間の卒業生らから無作為にそれぞれ250名ずつ（第5カテゴリについては改訂後2年間の卒業生のため64名）をピックアップする。合計で1,064名にアンケート用紙を送付、またはWebによる回答（Googleアンケートフォームを使用）を依頼する。両方法による回答件数は合計で95件であった。

アンケートは無記名とし、後にインタビューへ協力して頂ける場合にのみ氏名と連絡先の記載を求める。実施期間は2019年11月1日から12月31日までの2か月間とする。

以下の表にアンケート調査の「カテゴリ」、「対象者数」、「郵送/Web」、「回答」などを一覧にして示す。

2. インタビュー調査

アンケート調査時に協力可能と返答のあった卒業生と交渉し、上記のカテゴリに即したグループでのインタビューを行う。インタビューの方法はフォーカス・グループ・インタビューとし、以下に示す質問項目を軸に、座談会の形式で協力者らに自由に発言してもらう。

インタビュー内容はICレコーダーによって録音され、後に文字起こしを行い、テキスト化する。

インタビューは2020年8月24日と29日の2回に分けて実施する。一つのカテゴリにけるインタビュー時間はおよそ2時間とする。カテゴリごとに協力者の人数にばらつきはあるが、質問項目に対し全員に回答をもらう。以下にインタビューの詳細を示す。

1) インタビューの日時と協力者一覧

- ・第1カテゴリ（1名）8月24日（月）13時30分～
- ・第2カテゴリ（2名）8月24日（月）17時～
- ・第3カテゴリ（4名）8月29日（土）18時30分～
- ・第4カテゴリ（4名）8月29日（土）16時00分～
- ・第5カテゴリ（5名）8月29日（土）10時00分～

2) インタビューの質問項目

- ・自己紹介（在学時期、入学動機、現在の職業など）
- ・短大時代の印象に残っている授業とその内容、理由についてお話しください。
- ・現場での体験について、働き方や考え方に影響を与えたことをお話しください。
- ・望ましいカリキュラムのついての意見をお話しください。その際、必要な資質能力や、体育大学での取得であることをふまえて、お答えください。

表3 アンケート調査における諸情報一覧

カテゴリ	対象者数	郵送/Web	回答	備考
第1カテゴリ S44.4～S48.3	302名	250名	19名	
第2カテゴリ S49.4～H6.3	2,825名	250名	19名	
第3カテゴリ H6.4～H17.3	1,151名	250名	13名	
第4カテゴリ H17.4～H30.3	807名	250名	21名	郵送250名+Web依頼
第5カテゴリ H30.4～R2.1	64名	64名	23名	Web依頼

3 倫理的配慮

本研究は、特定の人物や施設名のデータを取り扱うときは匿名化を図り、データ結果の集計・分析を行う。(研倫審 2019-20 号)

III 結果

以上の方法によって収集されたデータを結果として以下に提示する。アンケート調査結果の集計結果は、紙幅の関係上、質問項目全ての結果ではなく、特筆すべき特徴を示した項目の結果について記載する。

1. アンケート調査

1) 入学動機

第1カテゴリから第4カテゴリまででは、「高校の先生に勧められた」という回答が最も多かった。しかし第5カテゴリでこの回答は減少し、代わって「スポーツをしたかった」という回答が最も多くなっている。そして「コース資格に魅力」がどのカテゴリにも共通して多い傾向が出た。また、「体育大学に編入できるから」が第4カテゴリ以降に回答が出てきている。この回答は第1から第3カテゴリではなかった回答である。

2) スポーツの経験とそれが在学中に活かされたかどうか

どのカテゴリでも高校まで体育系の部活動をしているという回答がほとんどであった。だが大学入学後にも継続する場合は、本学の部活動や学外のサークルも含め、全体的に見ておよそ3割ほどであった。短大以降のスポーツの継続は第1から第2カテゴリまではおよそ半々程度の割合であったが、第3カテゴリ以降は、非常に少なくなっており、1～2割程度であった。

しかしながら、全てのカテゴリにおいてスポーツの経験が「活かされた」という回答が「関係なかった」、「どちらともいえない」の選択肢を上回った。特に第5カテゴリでは非常に高い割合で「活かされた」と回答されている。

3) 印象に残っている在学中の授業とその授業内容

どのカテゴリにおいても「造形」、「ピアノ」がという回答が多かった。これらは、教職課程(幼稚園)の中で「教科に関する科目」である。第4カテゴリでは「身体表現」、第5カテゴリでは「幼児体育」も多数の回答として挙がっている。その他の少数の回答を見ても、全体を通し、演習の授業が多かった。

ただ、第1カテゴリにおいてのみ、「保育原理」、「保育内容総論」、「児童福祉」、「社会福祉」「心理学」なども挙げられており、これは保育士養成がこの期間のカリキュラムで行われていたことによる。

4) 「保育・幼児教育」についての印象に残っている在学中の授業とその授業内容

どのカテゴリにおいても「造形」、「音楽」、「幼児体育」、「身体表現」などの回答が多い。これらは上の回答と同様に「教科に関する科目」である。回答に伴うコメントの中で、「身体表現」においてレオタードを着用したという記述があり、このことが印象を強くしているようである(この点については、後のインタビューにおいても言及があった)。また、第5カテゴリで、「保育内容の指導法」という科目が入っている。第5カテゴリでは、保育・幼児教育の専任の教員が1名から4名になったことによる。

5) 在学中の楽しかったこと

どのカテゴリにおいても回答が多かったものは、「友達との交流」、「オペレッタ」、「野外活動演習」であった。第1カテゴリの時期には「音楽発表会」だったものが、第2カテゴリの時期には「オペレッタ」になったが、いずれにしても在学中の重要な思い出として残っていると回答された。第4カテゴリまでは2年生後期の「音楽表現」のほか、短大2年時の終わり2月の発表まで多くの時間をかけて取り組んでいることによる。

6) 在学中取得免許資格

回答者のうち「幼稚園教諭2種免許」は、どのカテゴリでもほぼ全員に取得されている。また、第1カテゴリ、第5カテゴリでは、「保育士資格」を多くの回

答者が取得している。

なお、第4カテゴリのその他の資格は、「ジュニアスポーツ指導員」であり、第5カテゴリのその他資格は、「障害者スポーツ指導員」である。

7) 取得できればよかった資格免許

第1カテゴリでは社会福祉士、看護師、栄養士、第2カテゴリ～第4カテゴリでは保育士、栄養士が挙げられた。また第5カテゴリの幼小コースで、保育士が希望として挙げられている。第2～4カテゴリで「保育士」の回答が多かった。

8) 卒業後役立った科目

第1～第3カテゴリまで共通して「ピアノ(音楽)」、「造形」、「体育」が挙げられた。第4カテゴリでは加えて「リトミック」が挙げられている。(参考までに、在学中の第5カテゴリでは、「実習」、「保育内容」、「図工」、「体育」、「発達心理学」、「教育相談」、「道徳」など多様な科目が挙げられている)。

9) 使命感

児童教育に関わる者としての使命感ないし心構えの意識、この道へ進むための動機付けについて卒業後と入学前の変化を質問したところ、第1から第3カテゴリまでは、入学前から使命感があったという回答がほとんどであったが、第4カテゴリから以降、その当時は未だ使命感はなかったという回答が多数を占めた。しかし在学中の実習、そして卒業後に実際に担任をすることで、どのカテゴリにおいても変化があったという回答となった。変化をもたらしたきっかけについて聞いたところ、次の表のような回答になった。

10) 資質能力

この質問では、「その他」を含め33項目の資質能力について選択となっている。ここで取り上げた項目は、現代的な課題に向けて日本の教育を資質・能力の育成を柱にしたものとして、学習指導要領及び幼稚園教育要領等が以下のように変えられたことを受けている。すなわち、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に関わる資質能力をピックアップしている。これらは、自らが児童教育を行うための主観的な資質能力についてはもちろん、一般的に児童教育に関わる者に必要とされるであろう客観的な資質能力も含めて回答を求めた。

結果として、「臨機応変さ」と「責任感」が非常に多かった。次いで、「観察力」、「体力」、「協調性」も多く回答された。これらはどのカテゴリにおいてもほぼ同様の割合で重要とされているようである(図1)。

11) 望ましいカリキュラム

第1カテゴリでは、記録作成、幼児理解、発達理解、障害児、手遊び・わらべ歌・色紙などの実践的な内容が回答された。第2カテゴリは、手遊び・お便り作成など、第1カテゴリと同様に実践的な内容はもちろん、保護者対応、海外の教育、保育理論、体育大らしい体を動かす授業などの意見も提示された。第3カテゴリでは、運動指導、手遊び・パネルシアター・運動などに加え、障害児への知識、社会人マナー、実習以外にも子どもとの関わりが必要、という意見もあった。第4カテゴリでは、製作、1日の計画作成、障害児への理解、幼児体育の方法、子どものメンタルへの理解、実習以外の子どもとの関わり、という内容が挙げられていた。

表4 在学中の取得免許資格

	保育士	幼稚園	小学校	中学	高校	その他	回答数
第1カテゴリ	17	18					19名中
第2カテゴリ		19	14				19名中
第3カテゴリ		13	8				13名中
第4カテゴリ		19	5			1	20名中
第5カテゴリ	8	19	13			2	22名中

表5 使命感の変化をもたらしたきっかけ(一部抜粋) 注:アンケート原文のまま

<p>1期(19名中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在学中に受けた授業や実習で保育士の役割の大切さを感じた時。 ・資格の前に人間性と気付いた時 ・やはり、中央の東京での勉強は田舎と違い、全国的に活躍の先生方の授業が受けられたことは、大きな変化を感じ、誇れることです。 ・「保母になる」という夢があったと思います。私立より公立という軽い気持ちで就職しました。行政の中で求められるものはその時代で変化し、対応しながら仕事を続けました。福祉的役割が多くなったことと思います。 ・入学前は子供好きだからと幼稚園教諭資格を取得-就職を考えていたが授業をうけ、通学するうちに子供を守る(安全に成長)事の大切さも教えられた。 ・日々の授業であり、ピアノの練習、又実習を通して現場(現実)を知り、とても大変な仕事であり、子どもの人的環境として自分自身、日々、勉強し高めていく事ができるか?と思わされた。 ・教育実習はしましたが、仕事現場に立つと親の意見やさまざまな子供がいて(例)みかんの皮がむけない等 日々の積み重ねでした。 ・クラス担当をして目の前の子どもをみた時 ・卒業後、勤務を始め、さまざまな場面に遭遇した為
<p>2期(19名中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習で、少しずつ使命感はわかるも、実際、勤務となると自責はかなりのもの、大学で学んだことは無駄ではないが、さらなる学ぶべきことは多々かんじていた。クラスをもたされ、子供をとりまく環境(家庭)の影響は沢山あることを感じた。 ・やればできる、一生懸命すること、努力はむくわれる <p>現場はとても大変(保護者対応なども含む)。大ケガをさせない保育をしないといけない。子の基本的な体力(体かん)がなさすぎ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年間、どっぴりと、必死に学んだから。正直、幼稚園と小学校の両方の資格を2年でとらせていただける厳しさとありがたさを感じた。遊ぶ?時間がなかった。 ・社会の一員として仕事をするということは思っていたより、ずっと大変だったからです。 ・やはり、貴校で学び、資格がとれ、自信につながった。 ・保育理論の先生の話聞いて ・現場での園児、保護者とかかわりや、園長からの指導 ・保育実習 ・きっかけはひとつだけではありませんが教諭1年目はがむしゃらにその日その日をこなすだけ頼りもないし心に余裕をもったの保育、子ども達への関わり だめだったはずなのにそんな自分をあたたく見守り助けてくれた保護者の方々のおかげで人へ対してのありがとうという感謝の気持ちが生まれ、のびのび生活できるようになり保護者の方々との関わりで子ども達を思う愛情を感じこの大切な命と大好きな保護者の方々の思いを全力で守らなければいけないという思いが毎年大きくなりました ・子育て経験により、命の大切さを身近に実感したこと
<p>3期(13名中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育実習で実際の現場に出て実感した。 <p>1人担任というのは休みがきかない 全てにおいて使命感なければ動まらない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・深く子ども達のことに関心をもちさらに考えるきっかけになった。 ・卒業後、すぐに担任の立場になり毎日が無我夢中だったので ・実習で出会った先生のお陰で更に幼稚園教諭のすばらしさ、大切さを知った。 ・実際に働いて責任のある立場になってから。 ・実務経験を経て、幼児教育の楽しさ、難しさがよくわかった。一度教職を離れ、自身の子育てをし、再度教職に戻り、親の立場を経験し、更に幼児教育に対する考え方、接し方等が変化したと思う。 ・担任を持たせていただいたからです。 ・教育実習

4期(20名中)

- ・先生方の熱意
- ・子どもが成長する姿、大人が言うことに子ども達が素直に行動すること
- ・同じ目標に向かって頑張る同級生。
- ・担任を持ったことで、漠然と考えていたことが現実になった時には、しっかりとやらないといけないという使命感が変化しました。
- ・卒業後、幼稚園に就職しすぐにクラス担任になりました。可愛い子ども達と日々過ごす中で子ども達の一年間の"育ち"のサポートを任されていると思うと気持ちが奮い立ち、より使命感を感じるようになりました。
- ・実際に幼児の視野で外を歩いてみるなど体験できたから。
- ・実習などで責任を持つようになったこと。

5期(22名中)

- ・教育実習
- ・実習を重ねるにつれてできることも増え課題も変わっていった。
- ・教える立場としての責任などに深く知れた
- ・授業を受けていく中で
- ・保育の考え方や現状を学べたから

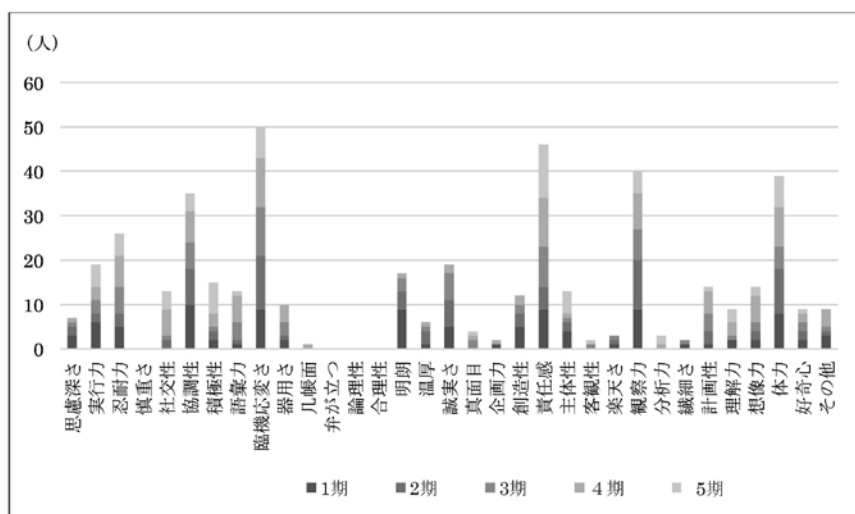


図1 求められる資質能力

2. インタビュー

5つのカテゴリの卒業生を対象にグループインタビューを実施した。この内容を振り返ると、次の表のようになる(表5)。

まず、大学時代についての回答では、“オペレッタ”について、第1カテゴリ以外、第2カテゴリから第5カテゴリまで話題となり、費やした時間や技術面の修得においても、また人間関係の学びとしても、非常に多くのことを体験している。創作オペレッタは、児

童教育学科で特徴的なことであることが明らかになった。

“体育、運動関係の授業”で第1、第3カテゴリで「水遊びの大切さを学ぶ授業」があったことが話題になった。プールが構内にあることで、水泳の体験ができることが本学の特徴だといえる。幼児期には水の事故も多く、その学修ができるのは独自性のあるカリキュラムだといえる。また、「体操、新体操など専門的な技術の体験」については、専門性の高い教員から専門的なことを学んだことをよかったと思う場合

表6 インタビューの話題

しても自立していなければならない。登山やオリエン

	大学時代	現場経験から	カリキュラム関連して
第1カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・幼保の資格が欲しかった ・水泳の能力によって児童教育に入学 ・プールでの水遊びの大切さを教わった授業 ・伊澤エイ先生 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある子の支援 ・自分で研修すること(リズム、体操、ムーブメント) 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく自己発揮 ・メンタル ・セルフサポート ・2年生が1年生を教える ・自分を振り返ること
第2カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ ・プール ・ダンス ・他大学は手遊びとか読み聞かせ ・運動の教え方 ・哲学 ・オペレッタ 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児 ・文章、電話、メールは保護者と公的文書、指導要録作成 ・見て覚えるのは無理 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続するなら楽天的 ・チームワーク ・部活での声出し ・自他の違い ・挨拶、笑顔 ・運動遊びの教え方 ・いろんな引き出し
第3カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・造形表現 ・体育、プール ・保育心理 ・オペレッタ 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て経験 ・ESD(持続可能な開発のための教育) ・見通し ・授業とのリンク 	<ul style="list-style-type: none"> ・臨機応変 ・礼儀、挨拶 ・書くトレーニング
第4カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・オペレッタ ・身体表現 ・ピアノ ・野外活動(キャンプ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症 ・保護者対応 ・実習生:他大学で先輩から実習のことを学ぶシステムがあること 	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ姿勢 ・臨機応変 ・実践的なもの ・グループワーク ※幼・保への社会の理解
第5カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・造形 ・運動遊び ・ピアノ ・乳児保育 ・子どもの保健(おむつ替え) ・子どもの栄養(離乳食) ・絵本・手遊び・わらべうた ・オペレッタ 	<ul style="list-style-type: none"> ・予防接種 ・喜び:子どもから「先生」 ・保護者からの言葉 ・障害児 ・保護者対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察力 ・想像力 ・乳幼児のための運動指導法、運動遊び ・クラブとの両立難しい ・指針解説・要領解説

と、自分には必要のないことで、もっと子どものことを

教えてもらいたかったという両方があった。

また“野外活動”で4泊5日の体験をすることについて、第4カテゴリで特徴的な体験であり思い出深いと話題になった。野外でのテント泊、飯盒炊爨などの体験は、非日常の空間での集団活動であり、緊密に目的を共有する仲間を作る必要があり、生活行動と

テーリングなど、自然環境についての意識もたかまる。他大学ではあまりない活動であり、印象に残るものとなったという意見が出た。

次に、就職後の現場体験の話題では、“障害のある子どもとその保護者”と出会い、関係を築くことが大きな体験となっていることが明らかになった。障害の

ある子どもたちに“実習”でふれあい、それをきっかけとして深く学ぼうと思ったという発言もあった。さらに、“保護者”“同僚”との人間関係が、働くことでの問題意識や意欲、やりがいなどと関連していることがわかった。保育・教育現場では人との関係性が多様に築かれて、それが良好な状態で保たれることが必要になってきているという。これについて、カリキュラムにある“野外活動”や“オペレッタ”“実習”は、人間関係の体験の場となっていると振り返る発言もあった。短期間で目的を共有して活動したり、紆余曲折を経て達成感を味わう活動となったりしているという。そして、直接結びつく科目ではないが、“クラブ活動”には立場の異なる人とかかわりが多く含まれているという発言もあった。規模の大きい大学では、こういった人間関係を築く体験は、概ね全員にはなく、個人差が大きいと思われるが、本学は規模が小さく、2年間の中で体験が用意されているのが良いということであった。

次に、インタビューの中でカリキュラムに、すぐ使える技術として、“運動遊びの指導”やいろいろな活動を引き出しとして持てるような内容が入っているということ、書くトレーニングが必要ということ等が話題になった。また、厳しい現代的課題に向かう保育者としての心持ちとして、楽天的なこと、楽しく、笑顔で自己発揮することが大切だということも話された。より実践的な授業があればよいだろうということであった。また、クラブ活動など体育大ならではの体験から培われていくという、本学の伝統や文化が育むことも言及されていた。

IV 考察

アンケートの質問項目における「1(2)入学動機」で明らかになったことは、どの世代においても「高校で勧められる」という進路決定が大多数であったということである。つまり、本学の卒業生である教員が本学を勧めてくれた、ということである。しかしながら、高校の教員が進路相談をする以上、その卒業生は児童教育学科出身ではない。にもかかわらず、体育の教員としての卒業生が専門違いの児童教育学科を進める背景や関連は、おそらくスポーツ、

すなわち部活動ということになるであろうと推測される。実際、短大入学後に部活を続けるかどうかの選択はあまりないという結果であったが、他方、高校在学時にはほとんどの人が部活動に所属していた。ここで卒業生とのつながりが生じ、本学が進学の選択肢に入るであろうと思われる。

ただ、その高校教員である卒業生数が少なくなっているということも影響して、短大のみならず学部でも卒業生子女の推薦は減ってきているのが実情である。近年は進学の相談を高校の教員でなく、インターネットなどを使って自分で行っているケースも多いと思われるが、しかし人の語る具体的な体験談の方が選択に強い影響を及ぼすであろうことを考えると、短大の入学人数を増やすためにも学部から高校教員への進路を強化する必要があるだろう。

次に、在学中の学びにおいて印象的だった内容として、やはり音楽、ピアノ、造形などがどの世代のカテゴリにおいても挙がっていたが、これは実際に卒業後の現場において役立った学びと一致している。この点は非常に重要なことであり、在学中の学びがダイレクトに生かされている事例に他ならない。特にピアノの授業はインタビューにおいてもしばしば言及され、非常に厳しいものだったと回顧されている。

さらに体育に関する学びについて、アンケートはもちろん、特にインタビューにおいてその有益性が言及されている。リトミックやリズム遊びはもちろんのこと、水泳や野外活動など、実際に自分が運動し、それが子どもたちにとってどう生かされるのか、という学びは、在学中にはそれほど意識されないが、現場に出て長く働けば働くほどその内容が活かされてくるようである。そうした意味で、体育に関する学びは本学の特有性は、即効性はそれほどではないものの、有効に作用していると言える。これについての外的な理由として、1989(平成元)年に幼稚園教育要領が大きく改定されて、保育内容の領域が6領域から5領域になったことが影響を与えていると推測される。特に、6領域だった際に「絵画制作」、「音楽リズム」が小学校の教科「音楽」、「図工」、「体育」と関連性をもっていたものが、幼児教育の特性を反映した「表現」となった変化が大きいと考えられる。つまり保育者養成

の際には、幼児の「表現」の意味を踏まえて、理論をともなった実践の重要性を学ぶ必要があるということである。これが今後のカリキュラムを考える上で反映されねばならない点の一つである。

こうした印象に残る学びが卒業後に活用される一方で、「4(2) 望ましいカリキュラム」においては以下のような授業が在学中にあればよかったというニーズが示された。すでに上で示された内容ではあるが、それらを大まかに分類すれば、手遊びや運動遊びなどの「遊びの引き出しを増やすこと」、「幼児の発達、障害への理解」、「保護者への対応」や「記録作成などの作業」などといった学びが欲しかったというものである。

前者二つは、これまでの本学のカリキュラムの中で取り扱ってきた内容ではあるが、しかし卒業生からすればもっと授業で中心的に取り上げて良いものだ、という意見がアンケート、インタビューともに大多数であった。実際の現場で、子どもたちとの遊びの種はいくつあっても困らないということである。ただし、2年間という短い期間で技術獲得の時間を正課の中でふんだんに設けることは無理である。精選した活動から「子どもの楽しむ姿が浮かぶ」活動について自ら学ぼうとする姿勢を育てることが必要である。また障害児への対応は、座学で理解はしても現実の対処は全く別物であるという経験からそのように卒業生たちは言及している。これについては、非常に重要な指摘であり、これらの意見を反映したカリキュラム作りを目指さなければならないだろう。

そして問題は、やはり「保護者対応」である。卒業生の誰もが、これを働く上で大きな課題としているようである。これについては、在学中に複数回ある実習において学生がその実感を多少なりとも期待しているが、当然ながら実習先の園にとってこれはナイーブな問題である。積極的に実習生がその現実局面することは、お互いに大きなリスクとなるため、その期待通りにはいかない。様々な要因、事情、条件が絡み合い、一般化することができないため、マニュアル的な対応の教授などは困難である。この難しさについては、実は「資質能力」で求められる上位の内容が、子どもたちに対してだけでなく、まさに保護者に対して

も当てはまる。臨機応変さ、責任感、協調性は、保護者とのコミュニケーションの際にも重要なのである。卒業後に自力で、あるいは現場での教育に任せきりにするだけでなく、対応できる授業を検討することが求められる。ここで考えられるのは、授業では、関わりの重要性や根幹となる考え方を扱うことが望ましいであろうということである。例えば、一つの事例を扱い、立場を変え多角的なものの見方や多様な行動を自分事として考えることをディスカッションやロールプレイなどを通して学ぶことが考えられる。現場で出会う待たなしの場面について、覚悟をもって臨むための問題提起を授業で体験する必要があるだろう。

以上のことから、アンケートとインタビューから見えた本学児童教育学科のカリキュラムへのニーズの一端が垣間見られた。ニーズとして今後に解決すべき課題やさらなる強化すべき点が明確になったことは、今回の調査において非常に有益であった。特に、このような課題としてのニーズだけでなく、そもそも本学の特性として継続していくべき点も、同時に明らかになった。それは例えば、アンケートの「2(7)勤務先」の項目から、勤続年数の長さが明らかになり、そしてそれに伴う管理職へのキャリアアップの多さも明らかになった。これについてはインタビューにおいて、本学卒業生の教職への意識の高さや、しっかりとした責任感をもっていること、スポーツの体験などが精神的な強さをもたらしていることが見受けられた。保育の仕事は、保育者が使命感を感じながら勤務するような、子どもの命や発達にかかわる責任のある仕事である。その上で、在学中に現場の魅力や厳しさなどに会えることの意味、現場で強く使命を感じるようなことがあつての勤続勤務につながることは、非常に重要である。特に在学中の実習で、日頃の授業では学力においてやや低い成果しか表れていない学生であっても、実習で園の活動に対する態度が高く評価されている場合がある。挨拶、礼儀、機敏な行動といったものが、評価されているということである。これは、体育やクラブ活動で培われたことが活かされるということが考えられる。実際にそう回答する卒業生が多いことはもちろん、本学とは関係のない現場の同僚や上司にそのように評価されることがある、というイン

タビューの回答からもそれがうかがえる。本学が体育大であることを、好感を持ってもらえていただいているということである。学生が瞬時になんらかの行動がとれる、頭で考えるだけではない、ということが現場で求められ、それは本学で培われたり、本学の授業の中でも発揮されていたりすることと思われる。ここから、「体育大らしさ」や「即行動につなげること」をさらに磨いていくようなカリキュラムが必要だと考えられる。

したがって、いわゆるこうした精神的な芯の強さは、アンケートやインタビューでしばしば散見されるように、スポーツ経験の多さによって醸成されている可能性がある。もちろんその人自身のパーソナルな部分における要素もあるだろうが、短大とは言え、体育大学としての本学のカリキュラムの特色や、キャンパスの雰囲気など、有形無形の体育の特徴がこの効果をもたらしているのではないだろうか。この点については、さらなる検証を要するが、今回の調査において、明らかにその一端が提示されたと言える。

V 結論

児童教育学科であっても、体育大学であることを実感する科目が求められている。すなわち、体育、スポーツを実際に体験する科目があると、入学後のイメージができたり、その授業を受けてみたいと考えたりすることが予想される。実際に、本学の伝統を踏まえたカリキュラム、すなわち体育に関連する科目は、今回の研究においてその意義が認められ、その継続が求められていると言えるだろう。本学で体育(スポーツ)の専門的知識や技能を持った教員による授業は、他大学では体験できない授業である。同時に、共に学ぶ学生同士においても、体育・スポーツを通じて培った文化、風土への共感性を持っていることで、より近い存在として尊重し合うことができる仲間になっている。こういった、学び舎全体の潜在的なカリキュラムとして、礼儀を重んじたり、実際に身体を動かしたりすることへの意欲や能力をもっていることなどを活かすカリキュラムが必要であると言える。

具体的に、これらのことを保育の学びにつなげた

カリキュラムの特性として提案できることは、プール、体育館など、本学の学修環境を活用することができる、とよいと言えるだろう。さらに専門的知識や技能をもった教員がいることを最大限に活かすことも求められる。それらの教員が保育内容を理解した上で授業を行うならば、児童教育学科の学生が保育においてどのような応用ができるのかを考える糸口を与え得ることができると考えられる。また、保育の専門知識や技能を持った教員とのコラボレーションを行うことで、特徴を持った上での総合的な学びに近づくことができるのではないだろうか。体育大学としての特徴をもった保育者養成を目指すためにも、学科全体で保育者養成のカリキュラムについて検討し科目間の連携を図ることが今後の課題となるだろう。

引用・参考文献

- 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会
(2002) 藤村学園100年のあゆみ、学校法人藤村学園(非売品)。
藤村学園創立百十周年記念記録等作成実行委員会
(2012) 藤村学園創立110周年記念 東京女子体育大学・東京女子体育大学この10年のあゆみ 2002-2012、学校法人藤村学園(非売品)。
学校法人藤村学園 学園報編集室(2018) 学校法人藤村学園 学園報 p.2、学校法人藤村学園(非売品)
学校法人藤村学園 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学(2011) 2012TWCPE 入試用大学案内(非売品)